

# 沿岸環境モニタリング手法と 住民主体型ガバナンスモデルの開発、 ならびに大学連携ネットワークによる普及 —日本、タイ、フィリピン—

〒252-0882  
神奈川県藤沢市遠藤5322 エ202  
<http://www.esd-asiapacific.com/>



ひろげる助成

3年目

調査研究



地域住民と開催したSDGsワークショップ

統合的モニタリング手法開発

2ケース

ローカルレベルの対話集会

1回

今年度計画の達成度

77%

活動の全体目標に対する達成度

64%

## 苦労した点と工夫した点



### ■ 苦労した点

メンバーが沖縄と東京に分かれて活動しているため、プロジェクト内の意思疎通をいかにして図るかが初年度よりのチャレンジだった。

### ■ 工夫した点

中間コンサルにて指摘された「コミュニティや住民の顔がなかなか見えてこない」という懸念を払拭すべく、今年度は沖縄中部西岸域を掘り下げる活動に注力した。

## 課題

サンゴ礁等の脆弱な沿岸生態系が人為的影響で悪化しているが、沿岸海洋域を取り巻くステークホルダーが複雑なため、陸域に比べその環境保全の取り組みが遅れている。

## 目標

沿岸環境の統合的モニタリング手法とそれに基づく住民主体型ガバナンスモデルが国際的に認知され、国際機関、各国政府による関連枠組み、政策等に反映される。

## 活動内容と成果

沖縄島中部西海岸域にてコミュニティ活動を中心としたフィールド調査、ワークショップ、個別インタビュー等を実施。住民との対話集会においては、村長をはじめとする行政、漁協、農協、観光協会、ダイビングショップ、ホテル、住民等、沿岸域を拠点とする多様なステークホルダーの参加を得ることができた。これらをSDGsの視点で統合することにより、2030年への展望をもとにした未来志向の活動にすることができた。最終年度に至り当初より目標としていた住民主体によるガバナンスモデルの試行段階に入ったものと考えている。



SDGs目標「海の豊かさを守る」

## 全助成期間の活動を振り返って

基金より支援頂いた3年間に、複数地域とのコンタクトを充実させることができた。具体的には、沖縄マリンレジャーセーフティービューロー (OMSB) の協力を得、沖縄本島だけでなく周辺離島 (石垣島、西表島、宮古島、久米島、座間味島、渡嘉敷島) におけるOMSB研修会とのリンクが見込めるようになった。また、沖縄県読谷村の自治体・農協・漁協・商工会・観光協会をはじめとする組織・個人との連携ができるようになった。



読谷村の漁港にて水揚げされた魚

## 今後の展望

SDGs「持続可能な開発目標」にローカルレベルから接近し、合意形成の実証実験をおこなう。具体的には読谷村での活動を継続する。恩納村、嘉手納町、北谷町等近隣自治体へ拡大することを目指し、コンタクトを強化する。

また沖縄および本土において大学ネットワークの形成をはかり、参加学生の所属大学の多様化をはかる。これにより対象分野を自然科学、政策科学に広める。